

鈴木鎮一著「眼の前のものが見えぬ人」 Suzuki Method 199、2017年第3号、才能教育研究会 2017年10月15日刊を読む

眼の前のものが見えぬ人

1. (1) 思う力、見る力は、人それぞれによって実に大きな相違があるものであると思う。単にヴァイオリンを学習するという一つだけについて眺めても、学習するということについての考え方や見方が実に千差万別であって、先ずその中の
(2) 一、ヴァイオリンと弓だけより外ほかのものは何も見えない人。
二、よい音を出すにはどうしたらよいか、という考えをもって学習する人。
三、どのように練習したら上達し立派になってゆくか、ということについて考えて学習する人。
の三種類を試みにとりあげてみても、その着眼点の優劣によって、上達が実に大きな開きをつくってゆくのである。
(3) 第一の「ヴァイオリンと弓だけ」より外にもものについて何も眼に入らない人の場合、先生の言うこと示すことは一切目にも耳にも入らない人で、まず私共の一番途方に暮れる人である。
2. (1) 昔話であるけれども、私が音楽学校の教授をしていた頃、生徒の中に一人、そういう生徒がいたので困ったことがある。
(2) 毎週一回のレッスンの度ごとに如何に音を出すべきか、弓の活用方法について私はその学生に、ていねいに示した。次の週になって、どれだけその練習がしてあるかと思ってレッスンを始めてみると、さっぱり何も練習してない有様である。曲だけは練習したらしく譜の玉を音にすることだけはやって来る。情けない音だし、弓を使うことが全然、目茶目茶なのである。
(3) 私もがっかりしながら、また弓について説明し練習の方法を授けてレッスンを終る。次の週はどうかと思うと、また同じこと。弓について、よい音を出そうとする方法についての練習はさっぱりやっていない。私はまた同じことをくり返した。私は根気よく毎レッスンこれをくり返しているうちに、何と二ヶ年経ってしまったのである。
3. (1) 私も根気負けしたので、二年目のある日、ついにその学生に
「弓は如何に音を出すために使用すべきかということについて、私は毎レッスンごとに貴方あなたに示し、説いて来た。
貴方は私の言うことを、少しもわかろうと努力しないのではないか。
もう二年間私は、貴方に同じことをくり返している。
残念ながら、もう私は、私が貴方にレッスンをやるのが意味がないと思うので、今日が最後のレッスンになるかもしれない。
来週の今日、もう一度ここで弾いて、私の今日示すことが少しも行われていなかったら、もう私は貴方を指導することを、お断りする決心をした」
ということを宣告したのである。そして私は出来るだけていねいにその方法と考え方を示した

のであった。

(2) 次の週になって、その学生がやって来て私の前で弾いたとき、初めて私はその生徒が私の示したとおりに練習したことを認めることが出来たのである。

(3) その日から、その学生は初めて、**ヴァイオリンと弓の外に示される必要なものを見る眼**が生まれたのである。二年間、鼻の先で、私が一生懸命示したり説明したりしたことを、全くうわの空で、見たり聞いたりしていたのだろう。

4. (1) いくら鼻の先にぶらさげてみせても、**心のあり方が駄目なら、その人の眼には入らない**ということ、しみじみと考えさせられたことである。

(2) 才能教育のいろいろな問題についても、全く同様に、**心ある人の心にのみ人間の姿が映じて来る**わけであろう。何も思わぬ人が実に多い。

(3) ヴァイオリンの学習についても、前記の音楽学校の生徒のような人々が、なかなかたくさん存在することを情けなく思うのは私一人だけではないだろう。

<コメント>

ではどのようにして本質的なものごとを伝えたらよいか。鈴木先生のように、粘り強く行う以外にないのではと考える。

— 2017年10月27日（金）林明夫 —